

幼児・児童における情緒語の理解*

今 井 靖 親 **

(心理学教室)

心理学では、「喜び」、「悲しみ」、「恐れ」、「怒り」、「驚き」などのように、急激かつ一時的に生起し、心搏、呼吸、血量、内臓などになんらかの生理的变化を伴うような感情を情緒または情動と呼んでいる。人間の心理活動が多種多様であるように、情緒にもさまざまな種類があり、これらの情緒を表わすことばもまたひじょうに多いが、ここでは上記の「喜び」「悲しみ」などの如く、情緒を表示することばをすべて「情緒語」と称することにしたい。

さて、情緒語というものは、いったい何歳ごろに獲得されるのであろうか。大久保(1967)はあ一人の女兒について、1歳4か月から6歳までの間に初出した反対語を報告している。それによると、「悲しい—うれしい」、「おもしろい—つまらない」、「好き—きらい」、「きれい—きたない」などの言語は、だいたい3歳ごろまでに反対語関係でとらえられているという。また、星野(1969)は、「楽しい」、「悲しい」などの情緒を表わした表情図を用いて、子どもが表情図にどのような情緒語をあてはめるかを研究し、3歳でもすでに表情をとおして「楽しい」「悲しい」などの基本的情緒の意味を理解していることを指摘している。これらの報告から、基本的な情緒語は、ほぼ3歳くらいまでに獲得されると考えてよいであろう。しかし、村田(1972)も指摘しているように、幼児がある言語を使用していても、必ずしもその語の真の意味を理解しているとは限らない。特に情緒語は幼児にとっては意味理解の困難な抽象語であるから、初めは子ども自身の感覚や感情との結びつきは弱いと考えられる。恐らく幼児は、成人との日常の接触の中で、何回ものつまづきを経過しながら、自己の経験に密着した形で、しだいにこれらの言語の正しい意味や適切な使用法を学習していくのであろう。

情緒語の意味理解に関して、これまでにさまざまな研究がなされているが、その中から二、三紹介してみたい。まず、Davitz(1969)によればFarmer(1967)は小学校2年生から8年生までの子どもに Happiness, Sadness, Love, Anger, Fear の5つの情緒語で表現されるような経験をした時、どのように感じたかを叙述させる実験をおこない、①子どもが成長するにつれて成人と同様な情緒経験の叙述が増加すること ②男子より女子のほうが情緒経験の叙述量が多いこと ③4年生と6年生との間に情緒経験を叙述する量に有意差があることなどの結果を報告している。次

* Understanding of the Language of Emotions in Children.

** Yasuchika Imai (Department of Psychology, Nara University of Education Nara.)

に、Davitz (1967) は文化の違いによって情緒語の意味理解に差があるかどうかの研究を行っている。すなわち、彼はアメリカ人とウガンダ人の12歳から20歳までの生徒に、Happiness, Sadness, Angerの情緒語で表現されるような経験をした時、どのような感じであったかを叙述させた。その結果、文化が異なっていれば、それぞれの情緒語の意味理解には違いがあるが、類似点、共通点も見い出されると報告している。さらに、Wolman, Lewis & King (1971, 1972 ②, ⑤, ⑥) は、5歳から13歳までの子どもを対象として、情緒語に関する一連の発達的研究をおこなっている。彼らが採用した情緒語は、Hungry, Thirsty, Sleepy, Happy, Sad, Angry, Scared, Nervousの8語であるが、これらについて、その情緒をどんな時に、どんなふうに感じたか、また身体のどの部分で感じたか、その情緒が生じた時どのようなことをしたかなどの質問がなされた。主な結果は次のとおりであった。①子どもの年齢が上昇するにつれて、④正答量が増加し、誤答が減少すること、⑥外的刺激よりも内的刺激によって情緒が喚起されるようになること。②女子の方が男子よりも、③正答量が多いこと、⑤Happy が継続することを望み、SadやScared を回避する傾向があること。

以上紹介したように、外国においては、情緒語の意味理解に関する発達的研究がおこなわれているが、わが国では、以下に紹介するごく一部のものを除くと、この種のテーマを本格的にとりあげた研究はないようである。まず松村(1970)は、幼児の情緒的発達の姿をとらえ、感情体験の成立の仕方を明らかにするため、「楽しい」「悲しい」など8種類の情緒語について、その情緒をどのような時に感じるか、またその時どうするかを調査した。その結果から、松村は、幼児でも年長児になるにつれて、自分自身に腹を立てるというような、内的刺激で情緒が喚起される場合もあることを指摘している。次に、中田・岡崎・前(1973)は、「おなかがよく」、「ねむい」、「のどがかわく」、「さびしい」、「楽しい」、「悲しい」の情緒語に関して、これらの情緒が生じた時、幼児がどのように情緒を表出し、問題を確決するかを調査した。その結果、年長になるにつれて誤答、無答が減少することが見い出された。このことについて中田らは、日常使用されているこれらの言語に対する幼児の理解度はさまざまであり、1つの言語が適切な概念として理解されるためには、多くの場面における行動と言語活動とが結びついた経験を用意しなければならないと述べている。なお、寺崎(1974)は、Davitz (1969)の作成した種々の情緒経験に関する主観的な表現やMAS, MPIの検査項目を参考として540項目からなるチェック・リストを作り、これを用いて「不安」、「恐怖」、「憂うつ」、「よろこび」の4つの情緒語について大学生に経験的な定義をおこなわせ、各情緒の特徴を明らかにすることを試みている。

以上、情緒語に関する研究をいくつか紹介したが、わが国では幼児の言語発達や情緒発達を明らかにするためにおこなわれた研究が多く、幼児期から児童期にかけて情緒語の意味理解を発達的に研究したものは見あたらない。そこで本研究では、幼児・児童における情緒語の意味理解について検討を加えることにする。

方 法

1. 被 験 者 奈良教育大学附属幼稚園5歳児、奈良保育学院附属幼稚園5歳児、奈良教育大学

附属小学校3年生, 5年生, 男女各40名ずつ, 合計240名。

2. 実験日時 1973年5月26日から7月11日まで。

3. 材 料 情緒語として「楽しい」、「悲しい」、「苦しい」、「恐ろしい」、「おこる」、「驚く」、「恥ずかしい」、「くやしい」、「くよくよする」、「さびしい」の10語を使用した。

4. 手 続 き 幼児に対しては, 各幼稚園の応接室で個別に質問をおこなった。教示は次のとおりである。「これから私がいろいろ聞きますから, よく聞いていて答えてください。あなたは『楽しい』ということばを知っていますか。では, どんな時に楽しいですか。」幼児が第1の質問全部に答え終わったら, 次に「では, 楽しい時にはあなたはどのようなことをしますか。」と聞き, 回答を調査用紙に記入する。小学生に対しては, それぞれの学級で調査用紙を配布し, 「これはテストではありません。学校のせいせきにはかんけいありませんから, 気をらくにして, 思ったとおりにうじきに答を書いてください。人を見たり, 友だちと相談したりしないでやってください」と教示したのち次のように各項目に記入を求めた。第1問(例)「どんな時にいちばん楽しいですか。1つだけ答えて下さい。」以下, 他の語についても同様に記入を求め, 全部終了したところで, いま書き終った部分が見えないように用紙を半分に折らせてから, 第2の質問項目に記入を求めた。第2問(例)「楽しい時は, あなたはどのようなことをしますか。1つだけ答えてください。」

5. 結果の処理 松村(1970), Wolman, Lewis&King(1972)の用いた方法を参考とし, 被験者の回答を①表情(にらむなど)②言語(叫ぶなど)③動作(ふるえるなど)④身体的変化(心臓がどきどきするなど)⑤行為⑥感情の持続(ずっと楽しく遊ぶなど)⑦攻撃(なぐるなど)⑧逃避(逃げるなど)⑨回避(本やテレビを見て気をまぎらすなど)⑩克服(がっかりしないでがんばるなど)の基準に照らして評定し, 適切な回答と判断されたものには1点を与え, 不適切な回答または誤答や無答は0点とした。各情緒語ごとに, 2つの質問(情緒喚起場面と情緒表出方法に関する質問)がなされているので, 10語で20満点となる。このようにして得られた結果をもとに, 年齢(5歳児3年生, 5年生)と性(男子, 女子)による傾向を検討した。

結

果

1. 年齢別・男女別にみた情緒語の意味理解能力 年齢別, 男女別の平均得点は表1に示したとおりである。この結果にもとづいて, 3(年齢)×2(性)の分散分析をおこなったところ, 表2に示したように年齢と性の主効果が1%水準で有意となった。

表1 平均得点とSD

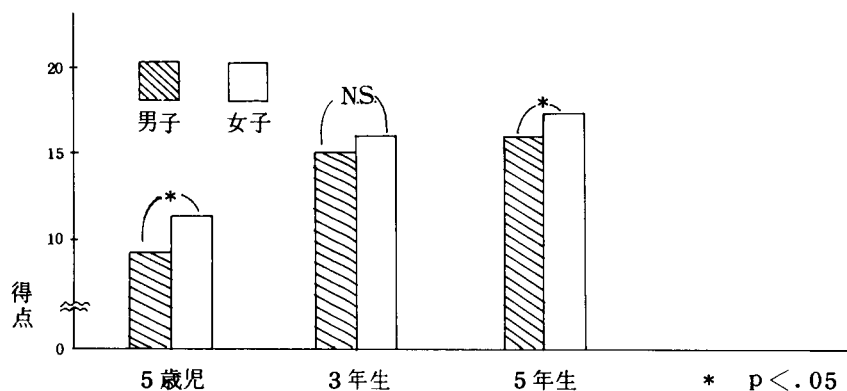
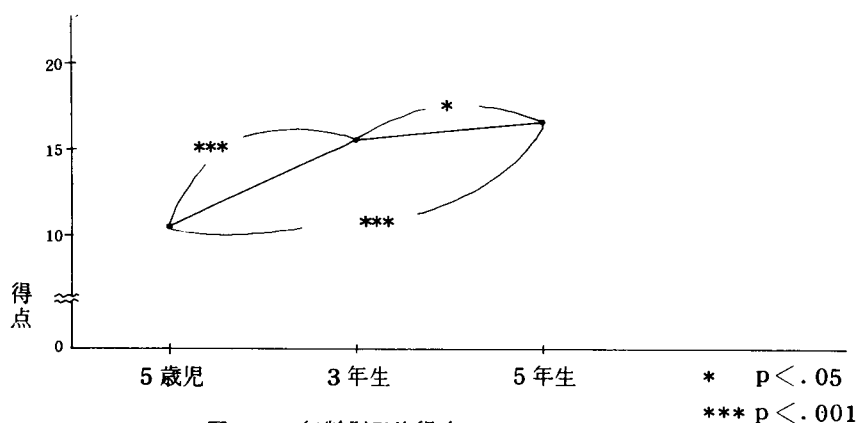
	5 歳 児		3 年 生		5 年 生	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
男子	9.65	4.26	15.08	3.62	15.73	3.06
女子	11.53	3.77	15.53	3.05	17.10	2.40
全体	10.49	4.12	15.31	3.31	16.42	2.79

表2 分散分析表

Source	SS	df	MS	F
1. 年 齢	1530.03	2	765.01	64.04 **
2. 性	91.27	1	91.27	7.64 **
3. 1 × 2	20.91	2	10.45	0.88
4. error	2795.40	234	11.95	
T	4437.60	239		

** $p < .01$

図1は年齢別の平均得点を示したものであるが、t検定をおこなったところ、5歳児と3年生、3年生と5年生、5歳児と5年生の間にそれぞれ有意差が認められた（順に、 $t = 8.62$, $df = 234$, $p < .001$; $t = 2.04$, $df = 234$, $p < .05$; $t = 10.66$, $df = 234$, $p < .001$ ）。図2は年齢別、男女別平均得点を示したものであるが、t点検をおこなったところ、5歳児と5年生において男子と女子の間に有意差が認められた（順に、 $t = 2.06$, $df = 78$, $p < .05$; $t = 2.21$, $df = 78$, $p < .05$ ）。しかし、3年生では男女間には有意差が認められなかった。



2. 喚起場面からみた情緒語意味理解の難易度 どの情緒語が理解しやすいかを検討するため、年齢別、男女別に、第1問（情緒喚起場面）における情緒語の正答率を比較した。全体を通じて、最も正答率の高かった情緒語は「楽しい」（98.4%）であった。第2位は「おこる」（88.4%），第3位は「悲しい」（87.1%）であり、最も理解困難な情緒語は「くよくよする」（26.3%）であった。

情緒語別、年齢別に正答率を示したのが図3である。 χ^2 検定をおこなった結果、正答率に有意差が見出された情緒語は、5歳児と3年生の間では、「悲しい」（ $\chi^2 = 3.84$, $df = 1$, $p < .05$ ），

「苦しい」($\chi^2=4.33$, $df=1$, $p<.05$), 「恐ろしい」($\chi^2=6.76$, $df=1$, $p<.01$), 「おこる」($\chi^2=15.84$, $df=1$, $p<.001$), 驚く($\chi^2=19.35$, $df=1$, $p<.001$), 「恥ずかしい」($\chi^2=32.04$, $df=1$, $p<.001$), 「くやしい」($\chi^2=34.56$, $df=1$, $p<.001$) 「くよくよする」($\chi^2=36.92$, $df=1$, $p<.001$)であった。3年生と5年生の間では, 「くやしい」($\chi^2=4.44$, $df=1$, $p<.05$) のみに有意差が認められた。

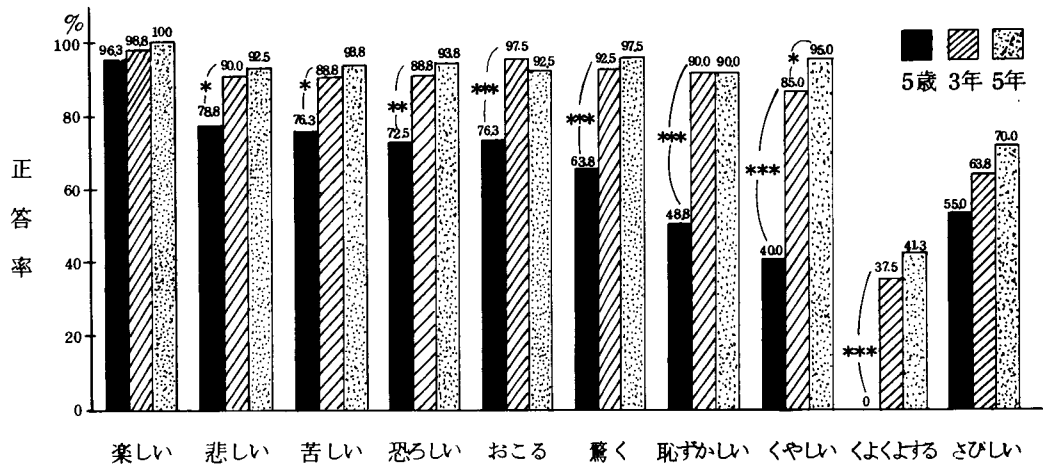


図3. 情緒語別・年齢別正答率

次に, 男女別に正答率を調べてみたところ, 5歳児では, 以下の3つの情緒語において, いずれも男子よりも女子の正答率が高かった。「悲しい」($\chi^2=6.05$, $df=1$, $p<.05$), 「苦しい」($\chi^2=5.59$, $df=1$, $p<.05$), 「恥ずかしい」($\chi^2=8.46$, $df=1$, $p<.01$)。5年生では, 「くよくよする」の正答率が男子で28%, 女子で55%となり, 両者の間に有意差が認められた($\chi^2=6.24$, $df=1$, $p<.05$)。3年生においては, 男女間に統計的な有意差は認められなかった。

3. 「情緒喚起場面」(質問1)に対する回答内容 本実験では, たとえば, 「楽しい」という情緒語について, ①具体的な喚気場面, すなわち, いつ, どんな時に「楽しい」と感じるかを質問し(質問1), 合わせて, ②具体的な表出方法, すなわち, 楽しい時はどんなふうにするかを質問する(質問2)ことによって, 被験者がどの程度「楽しい」という情緒語を理解しているかを把握しようとするものであった。①②に対して, 被験者からはさまざまな回答が寄せられたが, これら进行分析・整理したところ, それぞれいくつかの共通の要素をもった内容にまとめることができた。紙数の都合で, 「具体的な表出方法」(質問2)に対する回答内容の分析結果は省略したが, 表3～表12に「情緒喚起場面」(質問1)に対してなされた回答内容の分析結果を示しておこう。

表3. 「楽しい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	遊び、運動などの身体活動 (野球、サッカーなど)	趣味 (ピアノ、プラモデルなど)	外出、旅行 (遠足、遊園地など)	その他 (テレビ・ラジオの視聴 学校の行事など)	無 答	計
5歳児	50(62.5)	4(5.0)	16(20.0)	7(8.8)	3(3.8)	80(100)
3年生	45(56.3)	11(13.8)	10(12.5)	13(16.3)	1(1.3)	80(100)
5年生	44(55.0)	9(11.3)	10(12.5)	17(21.3)	0(0)	80(100)
計	139(57.9)	24(10.0)	36(15.0)	37(15.4)	4(1.7)	240(100)

$$\chi^2=13.44, \text{ df}=8, \text{ N.S.}$$

表4. 「悲しい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	排斥、敗北 (仲間はずれ けんかにな けるなど)	罰、叱責 (叱られる など)	死	病気、傷害	孤 独	離 別	その他 (体やテレビ をとおして の体験)	無 答	計
5歳児	20(25.0)	18(22.5)	2(2.5)	10(12.5)	7(8.8)	2(2.5)	4(5.0)	17(21.3)	80(100)
3年生	19(23.8)	18(22.5)	18(22.5)	4(5.0)	2(2.5)	4(5.0)	7(8.8)	8(10.0)	80(100)
5年生	15(18.8)	11(13.8)	24(30.0)	2(2.5)	7(8.8)	4(5.0)	11(13.8)	6(7.5)	80(100)
計	54(22.5)	47(19.6)	44(18.5)	16(6.7)	16(6.7)	10(4.2)	22(9.2)	31(12.9)	240(100)

$$\chi^2=41.16, \text{ df}=14, \text{ p}<.001$$

表5. 「苦しい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	身体的苦痛 (登山、マラソン、首をしめ られるなど)	病 気 (かぜをひく、熱が出るなど)	精神的苦痛 (試験、困難な問題など)	無 答	計
5歳児	23(28.8)	38(47.5)	0(0)	19(23.8)	80(100)
3年生	38(47.5)	27(33.8)	6(7.5)	9(11.3)	80(100)
5年生	16(20.0)	37(46.3)	22(27.5)	5(6.3)	80(100)
計	77(32.1)	102(42.5)	28(11.7)	33(13.8)	240(100)

$$\chi^2=48.48, \text{ df}=6, \text{ p}<.001$$

表6. 「恐ろしい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	想像的生物 (ゆうれい、 怪獣、お化 けなど)	暗 黒	動 物	見られない 事 物	夢	叱 責	その他 (高い所、 交通事故 など)	無 答	計
5歳児	4(5.0)	6(7.5)	3(3.8)	3(3.8)	25(31.3)	10(12.5)	7(8.8)	22(27.5)	80(100)
3年生	18(22.5)	14(17.5)	9(11.3)	11(13.8)	6(7.5)	3(3.8)	10(12.5)	9(11.3)	80(100)
5年生	44(55.0)	12(15.0)	1(1.3)	5(6.3)	2(2.5)	6(7.5)	5(6.3)	5(6.3)	80(100)
計	66(27.5)	32(13.3)	13(5.4)	19(7.9)	33(13.8)	19(7.9)	22(9.2)	36(15.0)	240(100)

$$\chi^2=100.80, \text{ df}=14, \text{ p}<.001$$

表 7. 「おこる」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	他からの身体攻撃 (叩かれる, けられるなど)	所有物の侵害 (大切な物をとられるなど)	他からの言語攻撃 (悪口を言われるなど)	社会的名誉の侵害 (約束を破られる, 誤解されるなど)	不本意, 不満 (思いどおりにならないなど)	無 答	計
5歳児	43(52.5)	2(2.5)	6(7.5)	0(0)	10(12.5)	19(23.8)	80(100)
3年生	41(51.3)	15(18.8)	8(10.0)	10(12.5)	4(5.0)	2(2.5)	80(100)
5年生	38(47.5)	4(5.0)	22(27.5)	5(6.3)	5(6.3)	6(7.5)	80(100)
計	122(50.8)	21(8.8)	36(15.0)	15(6.3)	19(7.9)	27(11.3)	240(100)

$$\chi^2=57.46, df=10, p<.001$$

表 8. 「驚く」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	病気, 傷害 (交通事故など)	背後からのおどし	こわいものを見る (へびなど)	新奇なものを見る	予期せぬできごと (テストの成績がよいなど)	その他 (どろぼう, 紛失など)	無 答	計
5歳児	5(6.3)	19(23.8)	16(20.0)	7(8.8)	1(1.3)	3(3.8)	29(36.3)	80(100)
3年生	7(8.8)	32(40.0)	6(7.5)	8(10.0)	5(6.3)	16(20.0)	6(7.5)	80(100)
5年生	7(8.8)	31(38.8)	6(7.5)	6(7.5)	15(18.8)	13(16.3)	2(1.3)	80(100)
計	19(7.9)	82(34.2)	28(11.7)	21(8.8)	21(8.8)	32(13.3)	37(15.4)	240(100)

$$\chi^2=68.90, df=12, p<.001$$

表 9. 「恥ずかしい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	見知らぬ人との対面	失敗, 誤り	嘲笑 からかい	人からの注視	叱 責	その他 (はだか, スカートめくり)	無 答	計
5歳児	12(15.0)	3(3.8)	4(5.0)	12(15.0)	3(3.8)	5(6.3)	41(51.3)	80(100)
3年生	23(28.8)	18(22.5)	7(8.8)	10(12.5)	9(11.3)	5(6.3)	8(10.0)	80(100)
5年生	4(5.0)	41(51.3)	5(6.3)	12(15.0)	3(3.8)	7(8.8)	8(10.0)	80(100)
計	39(16.3)	62(25.8)	16(6.7)	34(14.2)	15(6.3)	17(7.1)	57(23.8)	240(100)

$$\chi^2=94.20, df=12, p<.001$$

表 10. 「くやしい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	排斥, 敗北	所有物の侵害	罰, 叱 責	社会的名誉の侵害	無 答	計
5歳児	13(16.3)	5(6.3)	12(15.0)	2(2.5)	48(60.0)	80(100)
3年生	54(67.5)	8(10.0)	3(3.8)	3(3.8)	12(15.0)	80(100)
5年生	58(72.5)	5(6.3)	2(2.5)	11(13.8)	4(5.0)	80(100)
計	122(50.8)	18(7.5)	17(7.1)	16(6.7)	64(26.7)	240(100)

$$\chi^2=106.20, df=8, p<.001$$

表 11. 「くよくよする」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	排斥, 敗北	紛失	失敗	罰, 叱責	無答	計
5歳児	0	0	0	0	80(100)	80(100)
3年生	12(15.0)	9(11.3)	5(6.3)	4(5.0)	50(62.5)	80(100)
5年生	4(5.0)	7(8.8)	11(13.8)	11(13.8)	47(58.8)	80(100)
計	16(6.7)	16(6.7)	16(6.7)	15(6.3)	177(73.3)	240(100)

$$\chi^2=9.84, df=4, p<0.05$$

(ただし 3年生と5年生間の検定)

表 12. 「さびしい」の回答内容と回答数

()内は%を示す

	孤独 (一人で留守番をするなど)	排斥, 敗北	離別, 死	無答	計
5歳児	36(45.0)	5(6.3)	3(3.8)	36(45.0)	80(100)
3年生	35(43.8)	9(11.3)	7(8.8)	29(36.3)	80(100)
5年生	46(57.5)	4(5.0)	6(7.5)	24(30.0)	80(100)
計	117(48.8)	18(7.5)	16(6.7)	89(37.1)	240(100)

$$\chi^2=7.92, df=6, N.S.$$

考

察

1. 情緒語の意味理解能力について 本研究では、幼児・児童が情緒語の意味を理解し、あるいは説明する能力は、年齢が上昇するにつれて高まることが明らかにされた。特に5歳児と3年生の間には、情緒語の意味理解能力に顕著な差があり、0.1%水準で統計的な有意差が認められた。元来、情緒語はかなりの抽象性をそなえた言語であるため、幼児や児童が、たとえ日常これらの言語を使用しているとしても、具体的にその意味を述べることは相当困難であるように思われる。また、村田(1972)やDavitz(1969)が指摘しているように、情緒語は「個人的な経験や学習の積み重ねをとおして獲得されていく」言語であるため、まだ生活経験の浅い幼児にとっては理解困難な情緒語が存在することも当然であろう。そして、先に引用したFarmer(1967)が述べているように、年齢が上昇するにつれて、子どもも次第におとなと同様の情緒体験をし、それに伴って、さまざまな情緒語を獲得していくのであると考える。

次に、男女差について検討をおこなったところ、3年生では男女間に統計的な有意差は見い出せなかったが、5歳児と5年生では、女子のほうが男子よりも情緒語の意味理解能力が高いことが認められた。これはFarmer(1967)の結果とほぼ一致している。村田(1972)によれば、Davis(1937)は、「9歳半までは言語的熟練のいろいろな面において、男子より女子のほうがすぐれている」と報告し、McCarthy(1954)は、「語いの発達に関しては、一般に女子のほうが男子よりすぐれている」と報告している。また、Dimitrovsky(1964)は、「6歳から12歳までの子ども

では、女子のほうが男子よりも情緒表出の識別力がすぐれており、これは女子のほうが情緒刺激に対する注意力がより敏感であるためであろう」と述べている。本研究の結果から考えた場合、情緒語の意味理解の適切さ、正確さ、情緒表出方法の豊富さ、多様さなどに関しては、幼児・児童期では、一般に男子より女子のほうがすぐれていると結論づけてよいように思う。

2. 情緒語の難易度について　すでに結果のところで述べたように、最も正答率の高かった情緒語は、「楽しい」であり、第2位が「おこる」、第3位が「悲しい」であった。逆に正答率の最も低かったのは、「くよくよする」であった。3年生と5年生では、「さびしい」、「くよくよする」が意味理解の困難な情緒語であったが、それ以外はほとんどが90%前後の正答率に達しており、難易度には顕著な差異は認められなかった。しかし、5歳児では、80%以上の正答率に達した情緒語は、「楽しい」(96.3%)のみであり、「くよくよする」「くやしい」「恥ずかしい」などは、幼児には理解困難な情緒語であることが明らかにされた。全体的に正答率の高かった「楽しい」「おこる」「悲しい」などは、基本的情緒語と呼ばれているものであり、幼児でもすでにその情緒を豊富に体験し、言語的にもじゅうぶん学習しているので理解しやすかったのであろう。これに対して、「くやしい」、「くよくよする」は、幼児期・学童期ではその情緒を経験することが比較的少ないし、情緒体験と結びついた言語学習も十分になされていないため、正答率が低かったものと考えられる。

3. 情緒喚起場面の内容分析について　「楽しい」の内容では、どの年齢においても「遊び・運動などの身体活動」が最も多く、それぞれ50%を越えているが、3年生、5年生では「テレビの視聴」も多数を占めており、現代の子供の生活実態をあらわしているものとして興味深い。「悲しい」は、8項目という多くの内容に分類された。それだけ、これはいろいろな場面、あるいはさまざまな刺激で喚起される複雑なニュアンスをもった情緒であるように思われる。5歳児と3年生では、「排斥・敗北」「罰・叱責」などに関係して「悲しい」と感じる者が多いのに対し、5年生では、「死」に悲しを感じる者が最も高い非率を占めていることが注目される。年長児は年少児よりも生活経験が豊富であり、経験に対する感受性や知的理解もゆたかである。それゆえ、多くの「悲しい」経験の中から「死」という最も強力で一番印象に残る場面を取りあげたものと考えられる。「恐ろしい」も回答内容が8項目に分類されたが、従来の恐怖対象の調査などでは常に上位を占めている「動物」や「天災」などよりも、「こわい夢をみた時」という回答が最も多かったことが注目される。また、現代っ子は「怪獣」に親しみを持ち、「おばけ」や「ゆうれい」などの存在は信じていないように思われるが、5年生では、「恐ろしいもの」として、これらの「想像的生物」をあげている者が55%の高率を示している。本やテレビで学習されたものなのであろうか。「おこる」はどの年齢でも「他からの身体攻撃をうけた時」が全体の50%前後に達していた。このように、「怒り」は年齢とはあまり関係なく、だいたい一定の場面や刺激によって喚起される情緒であり、「悲しみ」や「恐怖」という複雑なニュアンスをもった情緒とは異なり、その単純性が特徴のように思われる。「驚く」の回答内容では「うしろからのおどかし」がどの年齢でも多かったが、5歳児では36%が無答であった。幼児にこの情緒語の意味が理解できなかったためというよりも、説明が困難だったと解釈すべきであろう。「恥ずかしい」も5歳児では無答が多く、51%を占めていた。3年生では「見知らぬ人との対面時」、5年生では「失敗した時」という回答が多く、年齢により回答内容に差異がみられる。年齢が上昇する

につれて、「恥ずかしい」という情緒は、外面的なものから次第に自分自身の内面的なものに向けられ、「自分が失敗したときに恥ずかしい」というような受けとめ方が多くなるのではないだろうか。「くよくよする」は、どの年齢でも無答が多く、5年生でも58%が無答であった。この情緒語は定義自体にあいまいさがあり、たとえ被験者がこの種の体験をしていても、その意味を的確に説明することが困難であったように思われる。

要 約

本研究の目的は、幼児・児童が情緒語の意味をどのように理解し、説明しうるかについて、発達の傾向を検討することであった。実験には幼稚園5歳児、小学校3年生、5年生、男女各40名、計240名の被験者が参加した。情緒語は、「楽しい」「悲しい」「苦しい」「恐ろしい」「おこる」「驚く」「恥ずかしい」「くやしい」「くよくよする」「さびしい」の10語であった。これらの情緒語について、①上記の情緒がどのような時に生じるか（情緒喚起場面）、②上記の情緒が喚起された時にどのような反応を示すか（情緒表出方法）の2つの質問をし、回答を整理基準に従って評定した。おもな結果は次のとおりであった。①情緒語の意味理解能力は年齢の上昇につれて高まり、また、5歳児と5年生では、女子のほうが男子よりもすぐれた成績を示した。②各情緒語について意味理解の難易度をしらべたところ、「楽しい」、「おこる」、「悲しい」は、幼児においても正答率が高かった。③「感情喚起場面」についての被験者の回答内容を分析してみた結果、「楽しい」「おこる」は、喚気場面において年齢による差異が少なく、比較的共通性が見い出されたが、「悲しい」「恐ろしい」「恥ずかしい」は、これらの情緒が喚起される場面が多岐にわたり、年齢による差異も認められた。以上の結果にもとづき、幼児・児童の情緒ないしは言語の発達に関して若干の考察がなされた。

引 用 文 献

Davitz, J. R., 1969 The Language of Emotion New York & London: Academic Press.

Dimitrovsky, L., 1964 The ability to identify the emotional meaning of vocal expressions at successive age levels. In Davitz, J. R. (Ed.) The communication of emotional meaning. New York: McGraw-Hill. 69-86.

星野喜久三 1969 表情の感情の意味理解に関する発達的研究、教育心理学研究 第17巻 第2号、26-37.

松村 康平 1970 日本の幼児の精神発達、保育学講座9、フレーベル館、167-208.

村田 孝次 1972 幼稚園期の言語発達、培風館。

中田カヨコ、岡崎比佐子、前典子 1973 幼児の言語発達、日本教育心理学会、第15回総会発表論文集、114-115.

大久保 愛 1967 幼児言語の発達、東京堂。

寺崎 正治 1974 情緒語の経験的定義に関する一研究、日本心理学会第38回大会、発表論文集 1196-1197.

- Wolman, R. N., Lewis, W. C. & King, M., 1971 The development of the language of emotions: Conditions of emotional arousal (a) *Child Development*, 42, 1288 – 1293.
- Wolman, R. N., Lewis, W. C. & King, M., 1972 The development of the language of emotions: I Theoretical and methodological introduction (b) *Journal of Genetic Psychology*, 120, 167 – 176.
- Wolman, R. N., Lewis, W. C. & King, M., 1972 The development of the language of emotions: II Intentionality in the experience of affect. (c) *Journal of Genetic Psychology*, 120, 303 – 316.
- Wolman, R. N., Lewis, W. C. & King, M., 1972 The development of the language of emotions: III Type of anxiety in the experience of affect. (d) *Journal of Genetic Psychology*, 120, 325 – 342.
- Wolman, R. N., Lewis, W. C. & King, M., 1972 The development of the language of emotions: IV Bodily referents and the experience of affect. (e) *Journal of Genetic Psychology*, 121, 65 – 81.

